

宇治 大納言 源隆國の『安養集』に就いて

戸松 憲 千代

目次

- (一) はしがき
- (二) 隆國の傳記
 - (A) 隆國の出生と一門の繁榮
 - (B) 隆國の庇護者
 - (C) 隆國の榮達
 - (D) 隆國の晩年とその示寂
- (三) 『安養集』の編者及び述作の因由
 - (A) 編者に就いて
 - (B) 撰述の因縁
 - ① 自信教人信のため
 - ② 白蓮社の思慕
 - (C) 述作の由來
 - ① 本書と『禪樂記』
 - ② 本書と『往生要集』
 - (四) 『安養集』の體制と構成要素
 - (A) 本書の體制
- (五) 『安養集』の價值
 - (A) 佚書の片影
 - (B) 智光の『無量壽經論釋』を中心に
 - ① 拙稿「智光の淨土教思想に就いて」の補遺
 - ② 同拙稿の訂正
 - ③ 良慶(?)『安養抄』所引の『往生論疏』作者考
 - (C) 『安養集』と『安養抄』
 - ① 論題の相似
 - ② 引文の配合
 - (D) 『讃彌陀偈』及び『安樂淨土義』の著者に就いて
 - (E) 『今昔物語集』の著者に對する一暗示
- (六) 結び

こゝ數年來「日本淨土教」を學び來つて、私の最も遺憾に感じたことは研究資料の不足と云ふことであつた。特に目錄に名を止めながら、その述作の散缺せるものゝ如き、何としても諦めがたいものがあつたのである。然し私は思つた、すでに散缺してしまつたと思ひ込んでゐるものゝ中にも、案外現存するものゝ多くあらうと云ふことを。現に金澤文庫に於いて隆寛や長西の多數の逸書が発見せられた如き、その好例と云ふべきであらう。そこで私共の常に心掛くべきことは、かうした逸書の探搜に萬善の注意を拂ひ、徒らに紙魚の蠶食に任すべきでないことと云ふことである。勿論、かうした逸書の發見には多少の偶然性を伴ふであらう。然しそれは單なる偶然性であつてはならぬ。その偶然性の背後には、必ずやかうした、努力の必然性が把握されてあるものである。

かくて私は、去る三月一日眞宗學研究室の藤原君と相語つて、坂本西教寺に正教藏文庫を訪れた。同文庫の司書辻氏とはかね／＼面識もあつたので、同氏の特別な御好意に依つて、計らずも「淨土八番箱」の内に宇治大納言源隆國の『安養集』十卷を發見したのである。勿論本書も佚書の隨一で、私共の視野から永く遠かり、學界から更に注意を拂はれざるものであつた。尤も、本書の著者隆國は又『今昔物語集』の著者——これには異論もあるが——として有名な關係上、それに附隨して本書も國文學界の方面に於いては多少の注意が拂はれてゐたやうである。近くは坂井衡平氏の『今昔物語集の新研究』①に「隆國の著なる安養集は、今日恐らく所傳なかるべきを以て、如何なる内容と文體とをもてるものなりしかを推知するに由なきも、(中略)源信の往生要集などに倣ひて、旨と安養淨土の要諦を叙べしもの

ならん云々。」と言及してゐらるゝ如き是れである。それにしても、事實本書は永く流傳を絶つてゐたものであつて、従つてこれが發見は獨り我が佛教學界のみならず、國文學界の方面に對しても貢獻するところ多からんかと確信してゐる次第である。

翻つて思ふに、私は良慶の述作^②と思はるゝ『安養抄』の研究に従事してゐた關係上、本書に就いては相當に關心を持つてゐたのである。その題名から見ても明かなる如く、『安養抄』と『安養集』とは一類の述作であつて、即ち兩書の間には何等かの交渉を持つものにあらざるやと想像してゐたのである。そして、私の此の想像は偶然にも當つてゐたのであるが、それは兎に角として多年渴望してゐたところの本書が突然私の眼前に現はれたのであるから、何と云ほふか、その時の嬉しさと云つたら、實に筆説を絶せるものがあつたのである。

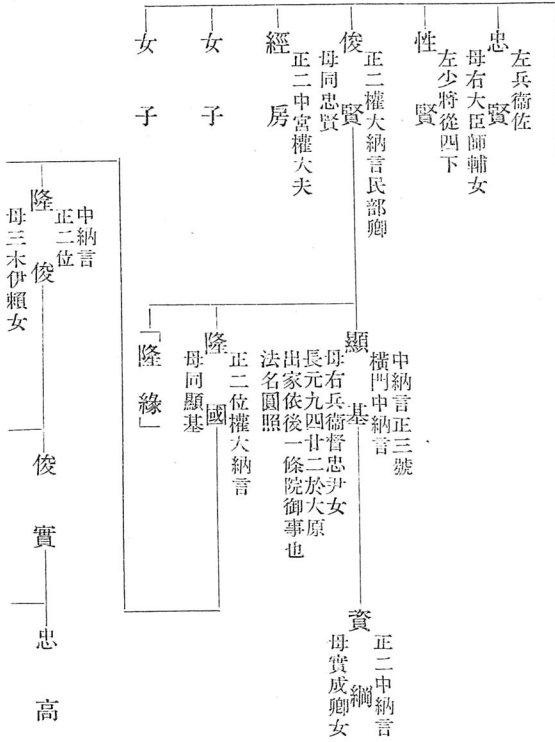
爾來、西教寺のあの古めきたる書院の一隅に、森閑たる鉦の音と間斷なく流れ落つる篋の音とを耳にしつゝ、前後四回、十有餘日を費して、本書の大體を寫し取つたことである。この間同派の管長貌下を初めとして小使さんに至るまで、種々御親切なるもてなしに預つた。何んと御禮を申してよいやら、實に有難き極みであつた。そこで以下粗漫ながら、坂本探訪第一回の研究報告として、本書の内容を解説し、大方諸賢の御叱正を乞ふこととする。なほ本稿を草するに當つては、本學國文學教授の兩宮兄に何かと御便宜を計つて頂いた。併せて謝意を表しておく次第である。

(二) 隆國の傳記

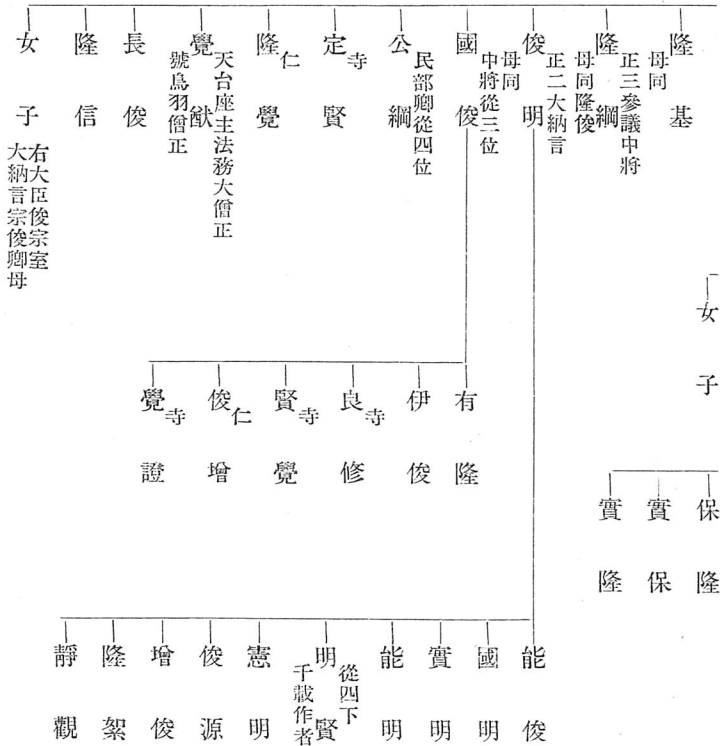
(A) 隆國の出生と一門の繁榮

隆國は醍醐源氏、一條帝の寛弘元年（一六六四）に呱呱の聲をあけたのである。初め宗國と云ひしも、後改めて隆國と稱す（『公卿補任』）。而して、その晩年癡癡して宇治平等院一切經藏のほとりなる南泉房に住せしを以て、人これを宇治大納言（或は字繼（忠相）と呼び、また南泉房大納言の稱がある。彼は名門の出で、その一族の繁榮も實に目出度きものがある。『尊卑分脈』に依つて之れを抄録して見よう。

○高 明
左大臣正二位賜源姓號西宮左大臣



源隆國の『安養集』に就いて



彼の祖父は有名な西宮左大臣高明で、父は道長の妻の一人なる高松殿と同胞、和歌をよくして道長とは昵近の間柄であつた。母は右兵衛督忠尹の女にして、後一條帝の寵臣顯基中納言は彼の實兄である。又彼の祖母が右大臣帥輔の

女なることも注目すべきであらう。

(B) 隆國の庇護者

加之、彼は有力なる後援者を持つてゐたのであるが、就中後冷泉帝、關白頼通等はその最たるものであつた。『古事談』卷一に

宇治大納言隆國、御冷泉院御在位之間、誇^ル朝恩無^キ貳^ノ之^ニ故、奉^シ爲^シ春宮^ニ、於^テ事頗^ル有^キ奇怪^ノ事等^ニ云云。

と云ひ、又同書卷二に

隆國卿於^テ宇蘇^ニ參^リ仕^ス宇治殿^ニ之時、眞實^ノの小馬^ニに乗^リて乍^ラ騎馬^ニ出入^ト云云。大納言被^レ申^ク云、此は馬には候はず。足駄にて候へば可^シ蒙^ル御免^ニ云云。宇治殿令^メ入^ラ興^ニ給^ヒて許容^ト云云。

とあるが如き、この間の消息を物語つて餘りあらう。更に、彼が上東門院の寵愛を蒙りしことも格別で、その叙位補任等の如きは、すべて何等かの形で、この女院と交渉を持つてゐたのである。^⑦

(C) 隆國の榮達

かくて、隆國は自ら名門の出であつたと云ふこと、及びその背後に有力なる支持者を持つてゐたと云ふこと、に依つて、著しき榮達を見てゐるのである。暫く『公卿補任』の示すところに従ひ、彼の官歴を表示し、その榮達の跡を偲ぶよすがとしよう。

天皇	年號	年齢	叙	位	補	任
三條	長和三年	十一	十二月十六日、從五位下に叙さる			

源隆國の『安養集』に就いて

(D) 隆國の晩年とその示寂

しかし、儘ならぬが人の世である。家柄と背景とその政治的才腕とに相俟つて立身出世を恣いままにした彼ではあるが、その七十有四年の人生行路には、痛ましくも悲しき事件が連続してゐる。萬壽四年(彼の二十一四歳)に於ける父俊賢と道長の薨去、永承二年(四十四歳)の長兄顯基(法名圓照)の示寂の如きは暫く措いて、特に彼がその晩年に於いて幾多の不幸に遭遇してゐることは注意すべき事柄である。即ち治暦四年(六十五歳)には後冷泉天皇の崩御に遭ひ、延久六年彼の七十一歳に及んでは三子隆綱の死を見てゐる。彼の恩顧者なる上東門院、關白頼通等の薨逝も此年である。而して、翌承保二年(七十二歳)には關白教通の薨去と共に力と頼みし長子隆俊も長逝してゐるのである。彼

後冷泉	寛徳三年	四三	九月二十三日、正二位に叙さる	二月二十六日、左衛門督を兼ね
	永承六年	四八		二月十三日、皇后宮大夫を兼ね
	天喜三年	五二		正月、左衛門督を辭す
	康平四年	五八		二月二十八日、權中納言を辭す
	八年	六二		十一月、皇后宮大夫を辭す
	治暦三年	六四		二月六日、權大納言に任ぜらる
後三條	四年	六五		三月五日、按察使と爲る
白河	延久六年	七一		正月二十七日、權大納言辭退。後日仕に准じて本封を賜ふことを宣示せらる
	承保二年	七二		十二月二十五日、大皇太后大夫に任ぜらる
	四年	七四		六月十九日出家、七月九日入滅

が入宋中の石藏阿闍梨成尋に送つた書狀には、

抑宇縣禪定、前大相國、去延久六年、甲寅二月二日薨去。同年、九月二十六日、愚息左親衛相公、溘然長逝。承保二年、乙卯三月十三日、又家督禮部納言、尋而薨逝。今以愁生、不能欲死、天之不與我。而我詞頑筆秃、猶難一二而已。

等とあつて、この間の消息が實寫せられてゐる。關白頼通の薨去と長子隆俊の逝去とは、正に青天の霹靂とも云ふべく、彼に取つて最大痛手であつたらしい。その悲痛落膽の情想ふて餘りあらう。

かくて、打ち續く不幸は彼に多大の打撃を與へたのであるが、それは又半面彼をして人生の如實相を自覺自省せしむるに大いに與つて力があつたのである。蓋し、眞實の幸福は人生を、否な自己自らを反省せざるものには存しない。而してかゝる反省は、多くの場合順縁にはあらずして、却つて逆縁の場合に生ずるものである。果して然らば、彼の生涯の一面に見ゆる華々しき生活——不出世の榮達、榮位榮官——は彼に眞實の幸福を齎すものではなかつたであらう。否な、今の連續的不幸こそ彼に取つて寧ろ祝福さるべきものであつたのだ。

こゝに於いてか、かゝる不幸を機縁として宗教的に自覺したる彼は、由來一切世事に關與せず(尤も永承二年には已むを得ざる事情に依つて亡兄隆俊の故職たる大皇太后宮大夫に任ぜられてゐる)、名利を捨て、専ら佛事を嗜んだのである。而して、『宇治拾遺物語』の序文や『異本門跡傳平等院』等に

宇治大納言源隆國卿者大納言俊賢卿息、左大臣高明公孫。老後宇治之平等院一切經藏之南山陰南泉房所閑居。仍號宇治大納言、然而宇治物語作者也。

とある記事に見れば、その晩年を宇治の南泉房に送り、惠遠ヒゼンの行跡アトを偲おもひつゝ、同志を語つて、ひたすら述作に専念したものの如くである。『今昔物語集』や『安養集』は、恐らく此の間に編まれたものであらう。

彼が掛冠したのは延久五年、後髪を薙つて出家し、而して同四年七月九日、口に彌陀の名號を稱へつゝその七十四年の生涯に最後の幕を閉ぢたのである。

(三) 『安養集』の編者及び述作の因由

(A) 編者に就いて

『安養集』十卷が隆國の撰述なることは云ふ迄もない。長西の『依憑目錄』にしても、文雄の『蓮門經籍目錄』にしても、すべて隆國の述作として指示してゐる。然し、それは據勝爲論して云つたもので、尅實には彼一人の述作と云ふことは出来ない。即ち、本書の編纂には無慮數十名の人々が参加してゐるのであつて、中には僧侶も居れば俗人も交つてゐる。本書の序文を見ると此の間の消息が窺はるゝ。

緇素慕ツ極樂世界フ之輩數十人、朋ヲ心翅レ誠選ハ集ス天竺震旦顯密聖教、本朝人師抄出私記ニ二百餘卷中、釋セル阿彌陀ノ功徳ノ之要文ト矣。殺青甫就、情索相諧。約爲ニ十卷ト、名ク安養集ト。蓋具ニ足シテ十念ニ往スル西方ニ之故也。

然しながら、此の編纂事業に主として描つたものは有髪の者にあらずして寧ろ無髪の僧侶であつたらしい。本書の各卷題下の割註に

本南泉房大納言與延曆寺阿闍梨數人共集

源隆國の『安養集』に就いて

とあるに於いて之れを想察し得よう。兎に角本書はかうした人々の助力を俟つて出来たもので、決して隆國一人の手になれるものではない。隆國の撰述には相違ないが、かうした人々の隠れた努力を忘れてはならぬ。

(B) 撰述の因縁

然らば本書は如何なる意趣、云何なる因縁に依つて撰述せられたものであらうか。暫く序文に依つて二義を擧げ得ると思ふ。第一は自信教人信のためであり、第二は惠遠の白蓮社を思慕し、追憶するがための述作である。先づ第一の原因より眺めて見よう。

① 自信教人信のため。上引の序文に

殺青甫就、情索相諧。約爲二十卷、名安養集。蓋乃具足十念、往生西方之故也。

とあるに於いて、本書撰述の理由が十念を具足して自ら西方極樂に往生せんと云ふ、所謂自信に存することは云ふ迄もない。然し、それは單に自信のみに止まるものでなく、やがて教人信として他にも及ぼさるべきものである。序文最後の文に

凡厥耳視其事、而隨喜、同聞斯文、而歸依之者、無親無疎、願開引接集。云爾。

とあるに徴して、これを首肯し得るであらう。「引接の集」とは念佛の行者を如來の來迎引接したまふ集と云ふことで、即ち本書の『安養集』を指したものである。極樂を願求するの輩は、親疎の如何を問はず、何れも此の『安養集』を緋けと論じてゐる。これ教人信の意にあらすして何ぞや。かくて本書は自信と同時に教人信を標榜し、彌陀の本願を自らも信じ人にも聞かしめんとするが本書述作の純一意趣である。

⑩ 白蓮社の思慕。如上一言せる如く、本書は主義を一にし、信仰を一にする同志の人々に依つて編まれたものであつた。隆國はその晩年を宇治の南泉房に送つたのであるから、恐らくかうした同志の人々は常に此の南泉房に出入したことであらう。而して、彼を中心とするかゝる同志の集ひは、遠く盧山の白蓮社のそれを思慕したものであつて、淨土教信仰を理想とする一種の結社の如き觀がある。勿論、それは白蓮社の如き盛大なものではない。結社と名のつく程のものでもない。然し、それが少くとも白蓮社を追慕せる同志の美しき集ひであつただけは確かだ。即ち本書の序文には

昔東晋釋惠遠與高士謝靈雲等二百二十三人於盧山巖下修淨土業臨終之時聖衆來迎。思其勝蹟脩所庶幾也。とあつて、この間の消息を忖度し得よう。

翻つて思ふに、かゝる淨土教主義の結社は本邦最初のことであつて、我が日本淨土教史上特筆大書すべき事柄だと思ふ。この結社の存在に依つて、當時如何に彌陀信仰が一般に瀰漫しつゝあつたかも想像せられ、又後世法然に於ける淨土教獨立の機運が當時すでに崩しつゝあつたことをも推察し得るのである。何れにしても本書はかうした因縁を持つて生れたもので、これまた吾人の注目したいところである。

(C) 述作の由來

源信の『要集』が良源の『觀音讚』、保胤の『十六相讚』、『日本往生傳』、爲憲の『法華經賦』等と共に宋國トウクニに送られ、その絶讃を博したことは餘りにも有名な話である。而して、この事實は隆國に深き感銘を與へたものゝ如くで、『安養集』の述作もそれに示唆さるゝ所が多かつた様である。そこで彼はこの『要集』渡宋の故事に倣つて入宋中の成尋（洛北石

藏の阿闍梨)に本書を託送したのであるが、本書も亦宋國人の稱讚を得たものらしい。「朝野群載」卷二十に見ゆる「大納言遣唐石藏阿闍梨許書狀」を見ると、その事が記述せられてゐる。煩しくはあるが、その全文を紹介しておく。

禪札一緘、投_ニ於_ニ萬里_一、析_{イテ}封_ラ仲_ラ紙_ヲ、宛_モ如_ニ面_展、珍_重々々。就_中被_レ示_メ先_巡禮_シ天台_山、廢_ス參_ス詣_ス五_台山_ニ之_旨宿願_既滿、誰_カ不_レ悅_乎。加_之、禪_下應_ニ天_子之_喚、露_ス雨_澤之_驗。寂_感已_至、賜_ハ大_師號_一。我_朝聞_ク者、莫_シ不_ニ嘆_美、況_於下_官哉。但_恨溟_海渺_焉、無_レ期_ニ再_歸。抑_宇縣_禪定、前_大相_國、去_延久_六年、甲_寅二_月二_日薨_去。同_年、九_月二_{十六}日、愚_息左_親衛_相公、溘_然長_逝。承_保二_年、乙_卯三_月十_三日、又_家督_禮部_納言、尋_而薨_逝。今_以愁_レ生_ヲ、不_レ能_レ欲_レ死_一、天_之不_レ與_レ我_一。而_我詞_頑筆_秃、猶_難一_二而_已。彼_安養_集、稱_揚之_由、隨_喜無_レ極_一。石藏_禪師_至、閻_梨位_一、是_只禪_下、他_年授_法之_令、然_歟。書_不盡_レ言_一、古_賢之_誠也。不_宣謹_狀。

承保四年三月

太皇太后宮大夫 源

謹上 石藏阿闍梨善惠大師禪室

かくて、本書の述作が『極樂記』や『要集』に由来するところありとするならば、一應本書とそれ等との關係に就いて一瞥しておく必要があるであらう。

① 本書と『極樂記』。本書撰述の原因が惠遠の白蓮社追慕にあつた事は如上一言せる如くであるが、それは『極樂記』序文の

大唐弘法寺釋迦才撰_{シテ}淨_土論_ヲ、中_載往_生者_廿人_一。迦_才曰_ク、上_引經_論二_教、證_ニ往_生事_一。實_爲良_驗。但_衆生

智淺不達聖旨。若不記現往生者、不得勸進其心。誠哉斯言。

とある記事に相似してゐる。即ち、彼が迦才の『淨土論』を思慕せるに對し、此れは廬山の白蓮社を追慕せるまでで、兩者の筆格全く相一致するものがあるであらう。然し、私はこの一事實のみを以て兩者の關係を云云するものではない。唯だこの一事を擧げることによつて、少くとも本書が『極樂記』の影響を受けたものにあらざるやを偲んで見たに過ぎない。

② 本書と『往生要集』。先づ題號に就いて考ふるに、『安養集』は序文で見らるゝ如く經・論・釋二百餘卷の中より安養淨土に關する要文を抄出したもので、その引文數實に五百三十四個、謂はゞ一種の「論題集」と云つたものである。この點「要集」も同一で、即ち「往生要集」なる題名は「安養往生に關する要文の選集」と云つた意味の言葉である。その引文（依據文も含む）の如きも、花山信勝氏の檢索に従へば九百五十二の多きに上り、或る意味に於いて矢張り「論題集」と云はれ得るものである。斯様に兩書はその題目に於いても、その内容構格に於いても一脈相通ずるところがあるのであつて、即ち「安養集」は「要集」の影響を受けたと見て如何であらうか。

次に本書序文の「縑素云々」の一句であるが、これも「要集」序説の指示を受けたと見るべく、暫く兩者を對照しておかう。

夫往生極樂之教行、濁世末代之目足也。道俗貴賤、誰不歸者。但顯密教法、其文非一。事理業因、其行惟多。利智精進之人、未爲難。如予頑魯之者、豈敢

縑素慕極樂世界之輩數十人、朋心翅誠選集天竺震旦顯密聖教、本朝人師抄出私記二百餘卷中、釋阿彌陀功德之要文上矣。殺青甫就、情索相諧。約爲

矣。是故依念佛一門、聊集經論要文。披之修之。之易覺易行。總有三十門、分爲三卷。(中略)置之座右備於廢忘矣。(『往生要集』)

又、本書序文の「夫蒼蠅云々」の如きも、『論註』に「如下劣夫跨驢不上、從轉輪王行、便乘虛空遊四天下無所障礙」とあると同一意味の言葉ではあるが、決して『論註』を受けたものでなく、源信の『觀心略要集』を受けたものである。對照して見よう。

夫蒼蠅之翔千里、附驥尾之故。巨石之渡、四溟載船上之故也。縱雖惡業之石重、方乘四十八願王之船、欲渡娑婆憂苦之海。(『觀心略要集』)

夫蒼蠅之飛不_レ過_二數步_一。適託驥尾得_レ絕_二釋焉_一。(佛撰)濃等、羅障雖深、修練雖淺、若乘彌陀之慈筏、盍到安養之寶池。(『安養集』)

これ『安養集』が源信の示唆を受けた實證の一つとなるであらう。

最後に、本書がその開卷第一に大文七科を立て、

念佛要文七門、一厭穢、二欣淨(この下割註あるも、今は之れを略す)、三修因、四感果、五依報、六正報、七斷簡。

と云へる筆格は、『要集』がその序説に十門を立て、

總有二十門、分爲三卷。一厭離穢土、二欣求淨土、三極樂證據、四正修念佛、五助念方法、六別時念佛、七念佛利益、八念佛證據、九往生諸業、十問答料簡。

と云へるに同致し、本書の『要集』を倣へること明白なるものがあらう。

上來、本書述作の因縁及びその由來に就いて論じ來つたことであるが、特に『極樂記』と『要集』とは本書の資材ともなつてゐるものであつて、後項に紹介するであらう如き本書の引文五百三十四個も『要集』のそれに負ふところが多い様である。この點本書を研究するものに取つて注意すべき事項であると思ふ。

(四) 『安養集』の體制と構成要素

(A) 本書の體制

本書は全十卷よりなり、その構格は大文七門、細門七十科と云ふことに盡きる。左にそれを紹介しておかう。

① 大文七門。大文七門とは、一に厭穢、二に欣淨、三に修因、四に感果、五に依報、六に正法、七に斷簡、之れである。而して、更にこれを細科したものが「細門七十科」である。

② 細門七十科。左の如し。

- (1) 厭離。(2) 欣求淨土。(3) 十方佛證明。(4) 極樂兜率難優劣難易。(5) 兜率極樂相對。(6) 極樂十方相對。
- (7) 諸法門中偏勸念佛三昧。(8) 念佛方法。(9) 修行久近。(10) 念佛。(11) 念佛三昧證。(12) 現世利益。(13) 現身
- 見佛。(14) 正爲凡夫說。(15) 要發菩提心。(16) 十念。(17) 滅罪。(18) 念佛利益。(19) 十六想觀。(20) 十六觀滅罪。
- (21) 水想觀地想觀。(22) 寶樹觀。(23) 寶池。(24) 華座。(25) 佛身量。(26) 佛相好。(27) 愍觀。(28) 三輩修因。(29) 佛
- 迎來不來。(30) 命終心三性五受分別。(31) 得道時異。(32) 劫量。(33) 往生相貌。(34) 往生難易。(35) 三輩九品異同。

(36) 九品往生階級。(37) 三輩九品階位。(38) 去此遠近。(39) 國土寬狹。(40) 世界安立。(41) 國土名號。(42) 極樂清泰同異。(43) 上下分別。(44) 三界攝不攝。(45) 五趣有無。(46) 土因。(47) 國土。(48) 寶池。(49) 寶樹。(50) 道樹。(51) 衆鳥。(52) 宮殿樓閣。(53) 成佛久近。(54) 佛誓願。(55) 飲食。(56) 不退。(57) 菩薩德行。(58) 觀音勢至。(59) 二菩薩授記。(60) 神通。(61) 聖衆光明。(62) 所化身相。(63) 三聚。(64) 女人二乘有無。(65) 羅漢生不生。(66) 諸趣往生。(67) 信毀因緣。(68) 經教興廢。(69) 翻譯說時。(70) 教興由致。

かくて論題七十個、之れに依つて當時淨土教に關して如何なる問題が注目されてゐたかを忖度することが出来るであらう。而して本書は、これ等各論題に對して平均八個の引文を按排し、實に科學的注意が拂はれてゐるのである。その手法の妙味は今日と雖も參考に値ひするものがあり、況んや當時としては破天荒の新案とも云ふべきものであつたらう。

(B) 本書の構成要素

本書の構成要素は經論釋五十一部二百餘卷より成立つてゐる。之れに依つて當時流行せる淨土教關係書目の大體を知ることが出来ると思ふから、引用回数、順序に從ひ、之れを掲げて諸賢の參考に供しよう。

① 經典。部數一三、引文數計一三三より成立つてゐる。(括弧内は引用回数を示す)

(1) 『無量壽經』(三六) (2) 『觀無量壽經』(二五)

(3) 『平等覺經』(一六) (4) 『阿彌陀經』(一四)

(5) 『大阿彌陀經』(二三) (6) 『大寶積經』(二二)

- (7) 『稱讚淨土經』(八)
- (9) 『大悲經』(一)
- (11) 『般若三昧經』(一)
- (13) 『增一阿含經』(一)
- ②、論釋。部數三八、引文數計四〇より成立つてゐる。
- (1) 懷感『群疑論』(五三)
- (3) 窺基『阿彌陀經疏』(二七)
- (5) 智光『無量壽經論釋』(二四)
- (7) 道綽『安樂集』(二〇)
- (9) 智顛『佛說觀無量壽經疏』(一九)
- (11) 法聰『觀無量壽經疏記』(一一)
- (13) 智顛『阿彌陀經義記』(一〇)
- (15) 善導『散善義』(七)
- (17) 靖邁『稱讚淨土經疏』(七)
- (19) 元曉『無量壽經宗要』(六)
- (21) 道闇『觀無量壽經疏』(六)
- (8) 『十往生經』(四)
- (10) 『隨願往生經』(一)
- (12) 『鼓音經』(一)
- (2) 義寂『無量壽經述義記』(三六)
- (4) 迦才『淨土論』(二六)
- (6) 璟輿『無量壽經連義述文讚』(三三)
- (8) 慧遠『觀無量壽經義疏』(一九)
- (10) 龍興『觀無量壽經記』(一九)
- (12) 源信『阿彌陀經略記』(一一)
- (14) 法位『無量壽經義疏』(八)
- (16) 窺基『西方要決』(七)
- (18) 源清『觀無量壽經疏顯要記』(七)
- (20) 元曉『遊心安樂土』(六)
- (22) 善導『玄義分』(五)

源隆國の『定養集』に就いて

- | | | | |
|------|---------------|------|----------------|
| (23) | 善導『觀念法門』(五) | (24) | 澄或『注十疑論』(五) |
| (25) | 天親『淨土論』(四) | (26) | 羅什『讚阿彌陀佛偈』(四) |
| (27) | 曇鸞『淨土論註』(四) | (28) | 『後出阿彌陀佛偈』(三) |
| (29) | 善導『序分義』(三) | (30) | 善導『定善義』(三) |
| (31) | 善導『往生禮讚』(三) | (32) | 羅什『略論安樂淨土義』(一) |
| (33) | 窺基『觀無量壽經疏』(二) | (34) | 周?『觀無量壽經疏』(二) |
| (35) | 智顛『十疑論』(一) | (36) | 吉藏『無量壽經疏』(一) |
| (37) | 法照『五會法事讚』(一) | (38) | 良源『九品往生義』(一) |

(五) 『安養集』の價值

本書の淨土教々學上の地位と云ふものは、種々の意味に於いて高く評價さるべきものであるが、左に氣附いた二三の點を述べて見よう。

(A) 佚書の片影

前項に於いて本書所引の經論釋が合せて五十一部存することを述べたが、その中には已に散佚せる書物も相當多數に存し、即ち『無量壽經述義記』(2)義寂、『無量壽經論釋』(5)智光、『觀無量壽經記』(10)龍興、『無量壽經義疏』(14)法位、『稱讚淨土經疏』(17)靖邁、『觀無量壽經疏顯要記』(18)源清、『觀無量壽經疏』(21)道闇、『觀

無量壽經疏』(33)窺基)、等は何れも今日吾人の目にし能はざるものである。

凡そ一人物の思想内容は、その人の著書を通じて眺むるが最も妥當なる見方である。が、その書物の散缺した場合の如きは、或は傳記なり或は門下の思想なりより推察せねばならぬ。然し、その書物が全く佚してしまつたものは仕方がないにしても、それが他の書物に引用せられてゐるが如き場合には、その引文を通じて思想内容の一端を把握することが出来るのである。勿論かゝる方法は往々にして危険性を伴ふ場合もあるが、逆にその一端に關する限り、何れの方法よりも確實なる場合もあるのである。

この意味に於いて、本書は重大なる存在價值を持つてゐる。即ち、本書は上述の如く一種の論題集と云つたもので、その論題下を見れば一目瞭然諸家の淨土教思想を把握し得るものである。殊にその引文の如き、長きものは一文で數千字、最も短きものでも數百字を存せしめ、裕にその思想を忖度し得るものである。實に本書の存在に依つて、己に隱没せる諸家の淨土思想が窺はれ、ほんの片影には過ぎないが佚書の面影をも偲ぶことが出来るのである。これ吾人の大いに喜びとするところ、本書の價値また重大なるものがあるであらう。

(B) 智光の『無量壽經論釋』を中心に

會つて私は「智光の淨土教思想に就いて」と題して本誌々上に連載したことであるが、その後本書『安養集』を見るに及んで、拙論の補遺せられ訂正せらるべき點の多々あることに氣附いた。そこで斯うした點の詳細は他日を期することとし、今は不取敢その大體を要記しておかうと思ふ。

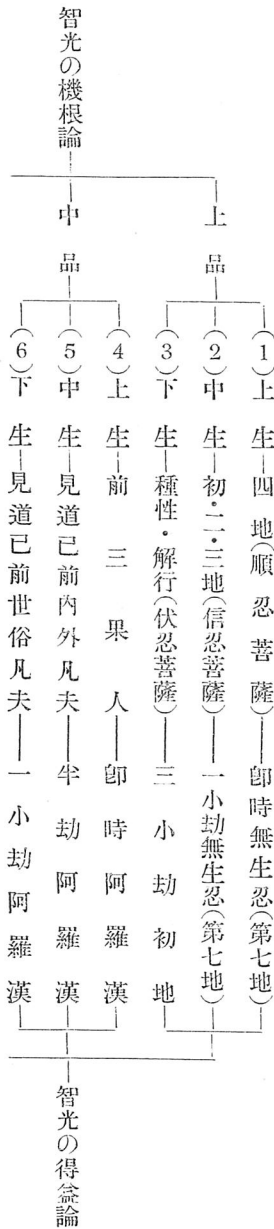
① 拙稿「智光の淨土教思想に就いて」の補遺。智光『論釋』の本書に於ける引文數は全體で二十四個ある。それを

拙論「智光の淨土教思想に就いて」の附録「天親淨土論・曇鸞淨土論註・智光無量壽經論釋三本對照表」に對檢するに、「對照表」に存するものは僅かに三個、餘の二十一個は全然見得べからざるものである。今その二十一文の内容を檢べて見ると(括弧内の数字は如上掲載の本書論題の番號を示す)

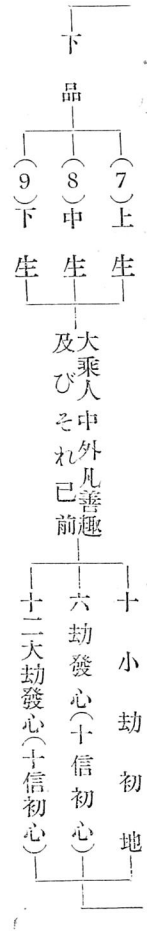
- (15) 要發菩提心(一文)、(16) 十念(二文)、(18) 念佛利益(一文)、(24) 華座(一文)、(30) 命終心三性五受分別(一文)、(36) 九品往生階級(一文)、(39) 國土寬狹(三文)、(44) 三界攝不攝(一文)、(47) 國土(一文)、(53) 成佛久近(一文)、(54) 佛誓願(二文)、(56) 不退(一文)、(61) 聖衆光明(一文)、(64) 女人二乘有無(二文)、(67) 信毀因緣(一文)、(70) 教興由致(一文)

となる。かくて、拙論は此等の諸論題を追加せらるべく、又拙編「三本對照表」も此等二十一個の引文を以て補足せらるべきで、私としては何より嬉れしき極みである。

⑤ 同拙稿の訂正。私は上の拙稿に於いて「智光の機根論及び生後得益論」なる一項を設けて、彼の見解が淨影・嘉祥の二師を受けたもので、



大體右圖の如きなることを論じた。



これは良慶(?)の『安養抄』に存する引文に依つて推論したものであるが、同抄^⑮には「無量壽論釋第四云智光……」とあるから、この「論釋第四云智光」に眩惑せられて、何でも智光の所説であると思ひ込んでしまつたのである。然し、それは隆國の『安養集』の出現に依つて全く誤謬なることが明かになつた。即ち、この『安養集』(『安養集』の引文は八百四十二字の)では先づ「先叙異計ニ説ニ示正義一。叙異計者復有三解。」と云ひて異計の三義を擧げ、次に「是就示正義一明ニ階位差別ニ者云云」と智光自身の正義を述して、以て上の三義の異計を一々懇切に論破してゐるのである。而して、この三義の異計の中、その第一義が淨影の所説であつて、如上の私の拙論は正しく此れに當るものであつたのである。私は智光の所破の對象となつてゐたものを以て、智光の所説であると誤解してゐたのである。それは智光の『論釋』中の言葉には相違なかつたが、決して智光の正意たるものではなかつたのである。

私は同様の誤謬を「智光の觀經三心觀」に於いて繰返してゐる。即ち私は如上私の拙稿に於いて、智光の三心觀は『觀經』の三心を「起信論」のそれに配當したものであつて、それは迦才の『淨土論』に據つたものであらうと論じておいたのである。これも良源の『九品往生義』に「淨土論智光疏云、依馬鳴説、此三心在十解初心。彼言直心即今至誠心。深心同之。彼云大悲心即今廻向發願心。」とあるに眩惑されたのである。已に「淨土論智光疏云」とあるので

あるから、この筆勢より見れば智光の所説と見るのがあたりまへで、それ以外の何ものかに見ようと注文するのは、已に注文することそれ自體が無理である。がそれは兎に角として、本書の出現に依つてこれも全く誤りであることが知られたのである。即ち如上異計の三義の中、第三は迦才の所説であるが、此の智光のあやまられたる三心觀は實にその中の一節であつたのだ。これも亦智光所破の對象となつてゐるもので、決して智光その人の正義ではなかつたのである。何れにしても、本書の出現に依つて、少しでも私の論文が完備に近きつゝあることを喜ばずには居られない。

① 良慶(?)『安養抄』所引の『往生論疏』作者考。良慶(?)の『安養抄』は色々な點で隆國の『安養集』に同致してゐる。これも一種の論題集と云はるべきもので、その引用書の中には未傳稀觀のものが非常に多い。今、日本淨土教關係の書目を擧ぐるも、智光の『無量壽經論釋』五卷、禪瑜の『新十疑論』一卷、千觀の『十大願記』一卷、靜照の『極樂遊意』二卷等が見らるゝが、それ等に伍して『往生論疏』なる一著の存することは注意すべきである。作者の名が記載されてゐないから、何人の作なるや勿論はつきりしない。初め之れを一見して智光の『往生論疏』ではないかと考へたのであるが、しかし能く檢べて見ると智光の『往生論疏』は本抄に於いて『無量壽經論釋』なる名の下に引用せられてゐるのであるから、一往これとは別個のものと思はねばならない。同一書物が同一箇處に二種の異つた名を以て引用せらるると云ふことは吾人の領解に苦しむところである。一例を擧ぐるならば、「問、九品人品位何耶」の論題下を見ると、先づ「往生論疏三云」と本書を引用し、次いでその直下に此れと肩を並べて「無量壽論釋第三」と智光の『論釋』があげられてゐるのである。若し、この『往生論疏』と智光の『論釋』とが本來同一のものであつたならば、その何れか一方の名

に統一して引用さるべきであらう。されば、良慶の『安養抄』に關する限り、この『往生論疏』は永遠に作者不明の書として取り扱はるべきであらう。然るに、隆國の『安養集』を檢するに及んで、計らずもそれが智光の『論釋』と同一のものであり、私の直觀の當つてゐたことに氣附いたのである。即ち、此の『往生論疏』は良慶の『安養抄』に九箇所引用せられてゐるのであるが、その中七箇所までが隆國の『安養集』所引の『論釋』と一致するのである。その一々の詳細なる考證に就いては、近く『佛教研究』紙上に掲載さるゝことになつてゐるからそれに譲り、今はその最も簡單なる二三を紹介しておかう。

彼佛土有菩薩善根男子、無有二乘女人根缺。

以體無故其名亦無。而經中言有聲聞衆、無量壽

佛變化所作。或諸菩薩化作聲聞天龍等身住淨土中

以供養佛、或自他身爲聲聞等翼從如來。爲欲

莊嚴說法會故、爲欲成就所化之緣隨順智慧普

化遊故。如爲下調伏摩訶劫賓拏王化勝軍王、爲

轉輪帝、七寶莊嚴眷屬圍遶。亦有經中、無量壽佛有

父母等亦復如是。佛及菩薩現爲父母、化分沒身

爲下引下劣胎生之緣速成就故。(良慶『安養抄』所

引の『往生論疏』)

源隆國の『安養集』に就いて

(上略)彼佛土人天之中但有菩薩善根男子、(無)有二三乘女人根缺。以體無故其名亦無。而經中言

有聲聞衆(中略)、無量壽佛變化所作。(中略)或諸菩

薩化作聲聞天龍等身住淨土中、以供養、或自化

身爲聲聞等翼從如來。爲欲莊嚴說法會故、爲

欲成就所作之緣隨順智慧普遊化故。如爲下調

伏摩訶劫賓拏王化勝軍王、爲轉輪帝、七寶莊嚴

眷屬圍遶。亦有經中、無量壽佛有父母等亦復如是。

佛及菩薩現爲父母、化分段身爲下引下劣胎生之

緣速成就故。(隆國『安養集』所引の『無量壽經論釋』)

次明_レ花開遲失_レ者、上品(上)生生已即開。上品中生
經_レ宿乃開。上品下生一日一夜。中上尋開。中中七日
中。(中下?)
下品七日。下上七七日。下中六劫。下下十二大劫。

言_レ尋開_レ者、一日三日尋已得_レ開。何以知_レ爾、上下日
夜、中中七日。故知、中上自在_レ上下與_レ中(中)間_上。

又中中與_レ上中下_レ俱言_レ一日。此亦應_レ有_レ遲疾。或
第七日朝夕有_レ異。或(雖_レ至_三)八日九日、然未_レ至_二
七日_レ故、隨_レ大數_レ同言_レ七日。(良慶『安養抄』所引
の『往生論疏』)

經中云_レ有_レ歌衆乃至雜色衆鳥、命命鳥等、言_レ取樂
又捷達縛等八部之屬。如_レ此是無量壽佛化變所作。令_レ
其宣_レ暢無量法音_レ利_レ樂有情。(良慶『安養抄』所引の
『往生論疏』)

文字の出沒、次第の前後等は多少あるけれども、これに依つて『往生論疏』と『無量壽經論釋』とが本來同一智光の述

復次明_レ華開遲失_レ者、上品上生生已即開。上品中生
經_レ宿乃開。上品下生一日一夜。中上尋開。中中七日。
中下亦七日。下上七七日。下中六劫。下下十二大劫。

言_レ尋開_レ者、一日三日尋已得_レ開。何以知_レ爾、上下日
夜、中中七日、故知、中上自在_レ上下中中與間_上。又

中與_レ中下_レ俱言_レ七日。此亦應_レ有_レ遲疾。或第七日
朝夕有_レ異。或八日九日、然未_レ至_二二七日_レ故、大數同
言_レ七。(下略)(隆國『安養集』所引の『無量壽經論釋』)

經中言_レ有_レ聲衆乃至雜色衆色、命命鳥等、言_レ取樂
又捷達縛等八部之(屬)。如_レ此皆是無量壽佛變化所
作。令_レ其宣_レ暢無量法音_レ利_レ樂有情。(隆國『安養
集』所引の『無量壽經論釋』)

作たりしことを首肯し得るであらう。

(C) 『安養集』と『安養抄』

『安養抄』は七卷、現在奈良東大寺圖書館の所藏にかゝり、三井の長吏良慶^⑩の作と云はれてゐる。上は淨土の三部經より下は源信の『要集』に至る諸經論釋の要文を抄出したもので、引文數實に六百三十個、やはり論題集と云はるべきものである。本抄は私の見るところでは、隆國の『安養集』に據つたもので、『安養集』を資料として撰述せられたもの、如く考へらるゝ。尤も此の點に就いては、已に坂井衡平氏も注意^⑳せられ、

隆國の著なる安養集は、今日、恐らく所傳なかるべきを以て、如何なる内容と文體とをもてるものなりしかを推知するに由きも、(中略)源信の往生要集などに倣ひて、旨と安養淨土の要諦を述べしものならん。良慶の安養抄の如きは、或は直接隆國の抄に就いて撰べる物なりかしと想はる。

と論じてゐられるが、勿論何等の論證も擧げてない。仍つて以下、簡單にこれが説明を與ふることゝしよう。

① 論題の相似。本抄の論題は八十六個を數へ得るが、その殆んど全部が隆國の『安養集』と相酷似してゐるのである。左にそれを掲げ、隆國の論題と御参照を乞ふことゝする。

- (1) 安淨淨土四種佛土中何耶(又加三身分別文)。(2) 安養爲上品淨土爲當如何。(3) 安養界去此量何。(4) 十六想觀中花座觀依正中何。(5) 阿彌陀佛身量何。(6) 觀彌陀人觀何相耶。(7) 不具足戒行生安養耶。(8) 九品往生者爲利物皆來娑婆耶。(9) 九品往生者得道云何。(10) 極樂說三乘教耶。(11) 極樂有三乘耶。(12) 有不發大乘心生彼土者耶。(13) 安養界有入無餘涅槃二乘耶。(14) 安養界有藏通二乘耶。(15) 五逆謗法者生極樂耶(加觀經意誹謗正法者可

- 云生極樂耶。(16)九品人品位何。(17)九品往生人皆有彌陀來迎耶。(18)九品往生人蓮臺寶相如何(加九品生人皆坐蓮臺耶)。(19)生極樂有不得香花供養菩薩耶。(20)清泰國與極樂同異云何(或說清泰)。(21)安養兜率往生難易云何(又優劣何)。(22)十念成就等及別時意趣文。(23)問懈慢國相云何。(24)三輩九品相攝文。(25)胎生者三輩九品相攝文(26)九品生人所經時節彼此文。(27)九品生人花開時節文。(28)九品生人所生時節定不文。(29)九品生人位次教相文。(30)上品上生人上中菩薩化佛授手文。(31)經名佛名減罪多少文。(32)下品三生減罪多少文。(33)諸往生人皆攝盡九品往生耶。(34)佛身道樹不同文(加佛身城不同事)。(35)六道衆生共生極樂耶。(36)諸往生人皆阿鞞跋致歟。(37)少善根文。(38)安養世界主女人耶。(39)凡夫未斷惑者生極樂耶。(40)阿彌陀佛已來劫數文。(41)阿彌陀之本願多少。(42)安養淨土菩薩聲聞多少。(43)翻譯文。(44)觀經雙觀經等說前後之文。(45)臨終十念者何等耶。(46)說無先世結緣者臨終十念成就耶。(47)佛光明大小。(48)生疑惑者生極樂耶。(49)往生人定業轉不文。(50)九品往生人皆生池水中耶。(51)極樂八部等有無文。(52)極樂四王乃至淨居有勝劣耶。(53)安養地相之文。(54)極樂國有苦耶(又加有捨受耶)。(55)觀行位開目閉目見佛事。(56)四種佛土淨穢之文。(57)化類婆沙遣人化草提如來自往文。(58)自然增進成阿那含文(59)教令正觀爲除疑心等文。(60)十六想觀減罪多少之文。(61)諸佛如來是法界身等文。(62)普雜二觀差別之文。(63)觀音勢至圓光不同文。(64)安養菩薩聲聞光明不同文。(65)生諸佛前得無生忍文。(66)觀乎相文。(67)退菩提聲聞生安養經幾劫數至初地耶。(68)中品生出家文。(69)少時心力勝終身事。(70)往安養者必爲生蓮花中爲當如何(加胎化二生耶。又勝劣如何)。(71)九品往生人蓮花未敷之前聞彌陀觀音說法耶。(72)阿難哩領文。(73)寶莊嚴土者只是安養之文。(74)生蓮花內者胎卵濕化中何耶(75)安養中人依正俱無勝劣耶。(76)安養世界輪日夜

劫數耶。(77)安養世界有無色天耶。(78)極樂衆生清且供養幾佛耶。(79)法藏比丘發心者何位發心耶。(80)何故名阿彌陀耶(加佛壽命阿僧祇劫者大劫數小劫數)。(81)胎生者處宮殿間識先世罪過耶。(82)極樂國有實食想耶。(83)極樂聖衆光明大小何。(84)釋迦滅後百歲間彌陀教流布者指何時耶。(85)藥師經所說八菩薩者淨瑠璃淨土菩薩歟爲當極樂菩薩歟。

㊦ 引文の配合。又引文の配合具合が非常に相似てゐるのである。左に一例を紹介して、餘は諸賢の御推察に任すこととする。

(隆國『安養集』(56)不退の條下)

阿彌陀經

阿彌彌經義記(智顛)

淨土論(迦才)

群疑論(懷感)

阿彌陀經略記(源信)

稱讚淨土經

源隆國の『安養集』に就いて(戸松)

(良慶『安養抄』(36)諸往生人皆阿鞞跋致歟の條下)

阿彌陀經

無量壽經

阿彌陀經義記(智顛)

大阿彌陀經

淨土論(迦才)

群疑論(懷感)

阿彌陀經略記(源信)

阿彌陀經疏(元曉)

稱讚淨土經

稱讚淨土經疏(靖邁)

稱讚淨土經疏(靖邁)

阿彌陀經疏(窺基)

阿彌陀經疏(窺基)

遊心安樂道(元曉)

遊心安樂道(元曉)

無量壽經論釋(智光)

無量壽經論釋(智光)

以上、①論題の相似、②引文の配合の僅か二項をあけたに過ぎないが、これだけで充分『安養集』(隆國)が『安養抄』(良慶)の所依となつたであらうことが推知さるゝであらう。

(D) 『讚彌陀偈』及び『安樂淨土義』の著者に就いて

『讚彌陀偈』及び『略論安樂淨土義』の二書は、今日では曇鸞の述作と見るが定説のやうである。然るに、古來これが眞疑の問題に就いては相當に論議が戦はせられたものゝ如く、近くは叡山の光謙と本願寺(?)の無名子との論評の如きがそれである。光謙は『略論安樂淨土義非曇鸞撰』^②一卷を著して、曇鸞説を否定して新に羅什説を立て、無名子は『略論安樂淨土義非曇鸞撰』^②一卷を書いて、曇鸞説に左祖して之れに對抗してゐる。今それ等の是非は別問題として、大體曇鸞否定説は天台宗側に在つて淨土教漸興時代の初期に見ゆる説であり、曇鸞肯定説は法然以後の純正淨土教側に見ゆる後期の説であつたらしい。圖示すると左の如し。

讚彌陀偈
安樂淨土義 著者異説系統

- | | |
|--------------------------------------------|---|
| (一) 羅什説——(1)隆國(安養集)(2)良慶(安養抄)(3)證眞(法華玄義私記) | } |
| (4)光謙(略論安樂淨土義非曇鸞撰)——據元曉(遊心安樂道・大經宗要) | |
| (二) 曇鸞説——(1)法然(2)親鸞(3)覺如(拾遺古德傳)(4)存覺(六要鈔) | } |
| (5)了慧(大經疏)——據迦才(淨土論) | |

備考 法然は『拾遺古徳傳』に依つて曇鸞説に左袒してゐられる事が知られ、親鸞は法然を純一相承せる人なるが故にや、はり曇鸞説を支持せるものと推定さる。(住田先生「略論の撰者に就て」無盡燈九卷二参照)

然し何れも根據のあることにて、羅什説は元曉に依つたものであり、曇鸞説は迦才に依つたもの、如くである。何れにしても、羅什説を採用せることは本邦に於いて隆國の『安養集』が最初のことで、これが良慶の『安養抄』、證眞の『玄義私記』と繼承せられ、その羅什説の系統を明かにし得たことは嬉れしき極みである。

(E) 『今昔物語集』の著者に對する一暗示

私は第三章(A)「編者に就いて」の條下に於いて『安養集』が隆國一人の述作でなく、彼を中心とする同志の人々の共作なることを論じた。これは、『今昔物語集』の著者を決定するに一暗示を與ふるものでなからうか。

思ふに、『今昔物語集』の隆國著者説を否定するの論據は、ひとへにその説話中に隆國以後の記事が存すると云ふにある。然し、これは隆國一人説を立つるからのことであつて、隆國を中心とする同志の人々の共編であると見れば何んでもないであらう。即ち、『安養集』の編纂に成功した彼は、ついで『今昔物語集』の編纂を企圖したことであらう。

然し彼は編纂半ばにして、その完成を見ずに逝去したものであらう。そこで本書は彼の遺命を繼いだ同志の人々に依つて——同志の一人であつても數人であつても可い——執筆せられ編纂せられたのであるが、恐らくその編纂は彼の死後長日月を費して完成せられたものであらう。かく見れば隆國著者説は古來の傳ふるまゝに肯定せられて、又『宇治拾遺物語』の序文に「往來の者貴き賤しきをいはず呼び集め、むかし物語をさせて」(隆國を中心とする同志の共作説を示す)とある筆格及び同序文に「後にさかしき人々書き入れたるあひだ、物語多くなれり、大納言より後の事書き

入れたる本もあるにこそ」(隆國死後編纂説を示す)と云へる筆勢にも合致するものがあるのである。

思ふに、當時は代作の流行した時代で、その例證は當時の日記類を見れば幾らでもあけ得る。現に隆國が成尋に送つた「宇治大納言遺唐石藏阿闍梨許書狀」の如きも、彼の執筆ではなく大江佐國の代作にかゝるものである。されば、本書の製作も、それが隆國の名の下に同志の一人或は數人に依つて編まれたものと見て敢へて不當な推理ではなからう。

加之、『安養集』と本書とは一雙の書として適しきものである。前者を安養淨土の要文を選集したる純學術的な純信仰的な書物であるとするならば、後者はそれを大衆に打ち出して卑俗的に選集したる説話的書物である。されば『安養集』の著者たる隆國に本書のあらうことは寧ろ當然なところであらう。上述は勿論私の單なる獨斷に過ぎない。思ふところを申し述べて諸賢の御叱正を庶ふ次第である。

以上、私は「安養集の價值」なる命題の下に種々論じたことであるが、要之本書の出現に依つて(A)佚書の片影が知られ、(B)拙稿「智光の淨土教思想に就いて」が補正せられ、更に『安養抄』所引の『往生論疏』の作者が決定せられ、(C)『安養抄』が『安養集』に據ることの多きことが窺はれ、(D)『讚彌陀偈』及び『安樂淨土義』の著者に對する系統が見られ、最後に(E)『今昔物語集』の著者の暗示も得られて、私としては本書に對してその價值を何處までも高く評價せずにはゐられないのである。

如上に於いて、私は『安養集』に關し論すべきことは大體論じ盡した積りである。然し極く早急の間に本書を寫し取つたものであり、又編輯子の督促のまゝ、僅か一兩日の間に脱稿したのであるから、想練れず意盡さず、誤謬も亦多々あるであらうが、その點諸賢の御是正を仰ぎ全きを他日に期したいと思ふ。(十三・六・十日稿)

註① 『今昔物語集の新研究』(九〇頁)

② 東大寺の橋本凝胤氏は『佛書解説字典』に、本書を以て「平安末期の作」と云ひ、「良慶の著すところであらう」と推定してゐれる。その理由は本書には源信の『往生要集』と永觀の『往生十因』とが引用せられてあり、而も本書の釋格が天台宗に立場を置くと云ふ理由に依つて、良慶著作説を立てゐられるのである。私としても今日のところ、それ以上の考へは出て來ない。然し、本書には『十因』を引用することは更でない。これだけは、是非訂正せらる可きことである。

③ 宇縣とは宇治のこと、當時の日記類に多く見受けらるゝ。亞相は大納言の唐名なり。『古今著聞集』の序文にも「夫著聞集者宇縣亞相巧語之遺類云云」とあり、又『長西錄』(佛全 P. 316)にも「安養抄十卷、宇縣亞相宇治大納言隆國」と見ゆ。

④ 『尊卑分脈』(卷十)

⑤ 『古事談』(國史大系十五 P. 21)

⑥ 同(國史大系十五 P. 50)

⑦ 『公卿補任』參照。

⑧ 坂井衡平氏の『今昔物語集の新研究』(P. 32)の指示に負ふところ多し。この書狀は『朝野群載』卷二十(史籍集覽本 P. 376)に見ゆ。

⑨ 佐藤博士「宇治拾遺物語考」(史學雜誌第十二卷第二號)の示指に依れば、これは「宇治拾遺物語」の序文より作文せるものであらうと論ぜられてゐる。

⑩ 第三章の(B)の⑩の條下參照。

⑪ 『往生要集』卷尾附録の「遣宋消息文」及び周文徳よりの「返報」參照。

⑫ 「往生要集諸本の研究」(龍谷學報第三二七號)

⑬ 『往生論註』(下卷 34a)

源隆國の『安養集』に就いて(戸松)

- ⑭ 『觀心略要集』(惠全卷一 p. 333)
- ⑮ 『安養抄』(大正八四 127a)
- ⑯ 『九品往生義』(淨全十五 7d)
- ⑰ 本書は『安養集』と共に私の發見にかゝるもの、詳しく解説は次號に掲載の豫定なり。
- ⑱ 靜照の『極樂遊意』は現に東大寺圖書館に藏せられ、最近佛專の惠谷教授に依つて『佛教學論叢』(第一輯)紙上に解説せられ、その全文が掲げられてゐる。しかし、この東大寺本は表題及び卷首の日想觀釋が缺けて著者の名を止めざる爲め、氏はその尾題の『極樂遊意』とあるより、恐らく『叡山の靜照ならん』と推定してゐられるに過ぎない。然るに、今やこの良慶の『安養抄』に於ける引文に依つて、これが正しく靜照の述作なることが、推定でなくて斷定せられたのである。しかし、その詳しく論證は後日を期せねばならぬ。
- ⑲ 註②参照。
- ⑳ 『今昔物語集の新研究』(p. 30)
- ㉑ 本書は現存せず。小山法城氏『略論安樂淨土義の眞偽に就いて』(六條學報一九八號)参照。
- ㉒ 開華院法住師の『教行信證金剛錄』(其六十二)にも「これは山門天台に於て讚彌陀偈と略論を羅什三藏と傳へる故、元祖も吾祖も略論御引用なし。」とこれが暗示を興へてゐらるゝ。
- ㉓ 但し、『讚彌陀偈』に就いては已に道綽の『安樂集』(下 19b)に曇鸞説が指示せられ、宗祖も亦『教行信證』(信卷)及び『讚彌陀偈和讃』等に之れを繼承してゐられる。又本『偈』の羅什説を取るものには隆國以前にも保胤の『日本往生極樂記』(佛全 P.53)がある。
- ㉔ 『今昔物語集の新研究』(p. 67—p. 117)参照。又尾上博士の如きも「今昔物語集解説」(日本文學大系第八卷 P.10)に於いて「眞にかくの如く、續々と隆國以後の記事があらはれて來ると、これらは皆、後人の補筆としてしまふことは出來ない。(中略)況んや、その以後のものがあるとしては、いよゝ隆國の著といふことは出來ない。」と論じてゐらるゝ。
- (附記) 本稿再校後、長友雨宮教授より隆國晩年の住所たる南泉房の位置に就いて左の如く御指示を賜つた。参考までに此れを附記して置く。

南泉房 舊跡在平泉院方丈南。土

俗其他ナイセン坊ト云フ。

(『山城名勝志』卷十八)